

sapporo
education and culture hall
news

raku

workshop + public performance

Tenkousei

3.11 fri.

【インタビュー】

高校生演劇ワークショップ+ 発表公演

平田オリザ作

「転校生」

橋口 幸絵 × 櫻井 ヒロ

「同時多発」のエネルギーが生みだす、
かつてない舞台を。

高校生演劇ワークショップ+発表公演
平田オリザ作「転校生」

「同時多発」のエネルギーが生みだす、かつてない舞台を。

演劇界に波紋を投げかけた現代口語演劇「転校生」を、22年の時を経て札幌で上演。さらに、ダンスと演劇の融合というチャレンジも加えられた舞台について、夫婦であり演出家である橋口幸絵さん・櫻井ヒロさんに語っていただきました。

札幌でも演出家として高い

評価を受けている橋口さんですが、今回の企画についての印象は？

橋口 最初は重い課題をぶつけていただいたなって思いましたね。自分はエンタメ性の高い冒険活動

(笑)、平田さんは逆にそういうものを排除した作品を作る方ですから。

でも、作品から「演劇批評の対象になる高校演劇」という当時の演劇界の最先端を作ろうとしたもろがきが見えて、その部分には深く共感し

ています。すべてそぎ落とされた舞

台、ということは何を足してもい

「まさか平田オリザの作品がこんな風に!？」と演出的に盛り込んでゆきたいと思います。

櫻井さんは演出と振付の両方を担当するのは初めての試みですね。

櫻井 コンテンポラリーダンスでは演出もしてきましたし、役者として橋口さんの劇団に駆り出されたこと

けられない作品が増えてきている。そういう作品も一緒に見えてきてい

し、これまでの蓄積があるから、わりとポンポンと意見を出し合っています。演劇とダンスの境界線を無くすような舞台がくれるんじゃないでしょうか。

ワークショップは、高校生からとても好評だったようです。

櫻井 コンタクトインプロビゼーションという、相手に触れながら即興的に踊るダンスワークショップを

したら、反応が大きくて。こんなに人と触れ合うなんて！とびっくりしたみたいです。でも慣れたらすごい勢いで楽しみ始めて、ワークショップ中に小作品ができましたね。

橋口 そういう感性がすごいですよね。みなさんとってもビュアで、10代

がふれて。わたしは高校生のみんなを子どもじゃなく、1人のアーティストだと思ってるんです。クリエイションの現場は教える、教え

くなかったです。ただ、僕以外全員女性なので、自分のほうが転校生みたいだと思っていました(笑)。

共同演出、さらに夫婦で、というのはまだ日本では

浸透していない手法ですが。橋口 普段から舞踊の方と同じテキストを使って「ここは演劇的表現

で「ここはダンスにしてみよう」といったワークショップを重ねて作品づくりをしているので、今回も違和感はないですね。平田さんの提唱

られるみたいな上下関係がない方がいいものが作れる。だから自分のことを「番長」って呼んでもらっているんです。自分も高校生と一緒に楽しんでいます。

最後にメッセージを。

櫻井 「転校生」は女子高生の会話が同時に進行する舞台なんです。なんでもない会話なんですけど、フォーカスしていくと平田さんの熱い思い

がパズルみたいに組み込まれている。まるでスルメのような、噛むほどに味が出てくる作品なので、じっくりと味わってください。

橋口 今回はダンス、演劇、さらに映像分野で活躍する映像作家の古跡哲平さんにも協力をいただいて、これまでに演出されたことのない「転校生」になると思います。そこに

高校生のパワーも加わるわけです。決まったことが何もない、そんなビュアな存在と、ダンスと演劇の垣根を越えた新しい舞台を作ってきたいです。

高校生演劇「転校生」 ワークショップ・オーディション

昨年8月に4日間かけて行われたワークショップ・オーディションには札幌市内外の高校生31名が参加。プロの演出家・ダンサーのWSを経て、3月公演に向けてのオーディションを開催。12月からは選ばれた20人の高校生たちの稽古がスタートした。



あらすじ

高校の教室。クラス的女子高校生たちの一日。課題図書に何を
選ぶか、親戚の病気や近い人の出産のことが話題となっている。
そこへ「朝起きたらこの学校の生徒になっていた」という転校
生がやってくる。課題図書のひとつ、カフカの「変身」の主人公の
ように。彼女を受け入れながら、身近でおきている恋愛や出産や
死をとおして、人間の存在の不確かさが浮かび上がってくる。



高校生演劇ワークショップ+発表公演 平田オリザ作 「転校生」

2016年3月11日[金] 19:00開演(18:30開場) 札幌市教育文化会館 小ホール
料 金/全席自由 2,000円(教文ホールメイト 1,500円)
[チケット] 教文・大丸プレイガイドにて発売中

Yukie Hashiguchi X Hiro Sakurai



[演出]
橋口 幸絵

劇団千年王國旗揚げからほぼ全作品の脚本・演出を担当。日本演出家協会会員。札幌大谷大学非常勤講師。近年は市民ミュージカルや子どもオペレッタ・BSプレミアムドラマの脚本など幅広く活動中。平成24年より札幌座のディレクターに就任。自らも役者として出演中。



[演出・振付]
櫻井 ヒロ

フランス在住時に(平成18年~20年)からフィジカル瞑想というワークショップを始める。年齢を問わず参加できる札幌市教育文化会館での「教文コミュニティダンス部」に演出・振付家として参加。平成26年には京都芸術センター主催dance4allにて、北海道代表として「あしあと」を再演。



2016年3月27日[日] 14:00開講

札幌市教育文化会館 研修室401

参加費 1,000円 定員:20名 ※未就学児はご参加いただけません。

お申し込み・お問い合わせ

札幌市教育文化会館 事業課 TEL 011-271-5822

※2月11日(木・祝)募集開始(電話受付)

今年で5回目を迎える札幌市教育文化会館主催「ダンスシンポジウム」。経験・年齢・性別に関わらずだれもが気軽にダンスを楽しみ、踊る楽しさを地域で共有する「ダンスコミュニケーション」を軸としながら、平成22年からスタートしました。

今回はテーマを「ダンスの壺」とし、地域で市民が触れ合うダンスについて知り、体験し、話し合う場をつくりだします。

ゲストは、昨年に引き続きソロ活動のほかに、障がいを持つ人や老人の作品制作やワークショップを手がける

等、ジャンルの越境、文脈を横断する活動を全国で行っている砂連尾理をゲストに招き、札幌で活躍中のダンサー！ファシリテーター櫻井ヒロ、北海道演劇財団「札幌座」プロデューサー木村典子とともに、「コミュニティにおけるダンスの実践事例の紹介とダンスの持つ可能性を多角的に紹介していく、参加型のワークショップも実施します。

前年度よりさらに充実した内容で、ダンスという枠を広げ、日常の中にもブラスアルファできる楽しさを探る、アクティブなシンポジウムです。

語る。踊る。ダンスを深めるシンポジウム。

平成27年度ダンスシンポジウム
 「砂連尾理ダンスワークショップ」
 十「レクチャーシンポジウム」

平成27年度ダンスシンポジウム



ゲスト

砂連尾理
 [振付家・ダンサー]

櫻井ヒロ
 [ダンサー・ファシリテーター]

木村典子
 [札幌座プロデューサー]

ダンスシンポジウム・スケジュール

13:30 受付 14:00 開講

講演 1 14:15~14:45

アウトリーチの現場より

講師: 櫻井ヒロ(ダンサー・ファシリテーター)

講座 1 14:50~15:20

「パフォーミングアーツ」の海外における事例紹介

[基調講演]

講師: 木村典子(札幌座プロデューサー)

講座 2 15:30~16:15

「ワークショップ—ダンスを知る」
 少しだけ身体を動かしてみよう

講師: 砂連尾理(振付家・ダンサー)

アシスタント: 櫻井ヒロ(ダンサー・ファシリテーター)

講座 3 16:45~18:00

「シンポジウムまとめ
 —社会とダンスについて」

パネラー: 砂連尾理(振付家・ダンサー)

木村典子(札幌座プロデューサー)

櫻井ヒロ(ダンサー・ファシリテーター)

進行: 桑原和彦(札幌市教育文化会館)

PICK UP EVENTS [教文主催事業ピックアップ]

札幌演劇シーズン2016-冬

SAPPORO ENGEKI SEASON・16/W

札幌で生まれ過去に高い評価を獲得した名作舞台の数々を1カ月間、毎日公演する「札幌演劇シーズン」。かつて観た人にはもう一度、見逃した人にははじめての感動を贈るプロジェクトです。札幌市教育文化会館では札幌座による「亀、もしくは…。」を上演します。



SAPPORO ENGEKI SEASON

札幌座第49回公演
 亀、もしくは…。

脚色・演出・音楽/斎藤歩

2016年2月4日(木)~7日(日)・
 9日(火)~11日(木・祝) ※8日(月)は休館

[会場] 札幌市教育文化会館 小ホール

あらすじ

舞台とはある精神療養サナトリウム、そこへ一人の医学生が見学実習に訪れ、世界的な権威ハドヴァ教授と出会う。教授は医学生を新しく入院した患者と勘違いするが、やがて誤解は解け、実習が始まる。特別観察室には自分のことを「亀」だと思っている狂暴な患者がいるという。医学生を残したまま教授は急患に呼び出されて出て行き、看護師が登場する。医学生と看護師は互いに相手を「亀」と思い警戒するが、そこへ本当の「亀」がやってくる。いったい誰が患者で誰が正常なのか、誰が観客で誰が演じているものなのか。そして、遂に理事長先生が登場する…。



MESSAGE

メッセージ

斎藤歩

札幌座チーフディレクター/ 脚色・演出・音楽

2014年2月に「西線11条のエリア」で教育文化会館小ホールでの公演をさせていただいて以来、2年ぶりにお世話になります。私は個人的にはこれまで数々の作品で教育文化会館のステージには立たせて頂いていません。95年に「最後の葉」「若草物語」、2000年には大ホールで「三人姉妹」、2003年に「コーカサスの白墨の輪」プレビュー公演を小ホールで、05年には「コーカサスの白墨の輪」本公演で大ホール、07年には「失踪者」で大ホールの舞台にお世話になっています。思えば、節目節目の重要な作品で教育文化会館の舞台に立たせて頂いています。

今回「亀、もしくは…」という作品は95年に札幌で初演して以来、20年に渡り繰り返し上演を重ねた作品で、ハンガリーで生まれ北海道で育った珍しいタイプのコメディで、各地で好評を頂き、海外でも公演を繰り返している作品です。

今回は折角素敵な舞台に上げさせて頂くので、これまでとは舞台美術も一新して、更に男4名だけで上演を繰り返していたものに、女性1名、しかも橋口幸絵という特権的肉体を持つ強力な劇作家・演出家を舞台に上げて、全く新しい「亀」をお披露目する予定です。

雪まつりの真っ最中ではありますが、教育文化会館の客席を暖かくしてお待ちしています。



教文アートめぐり

5

坂 坦道 (1920~1998)
 Saka Tandou

石川県生まれ。小学校3年生の時に母親と北海道札幌市に移り住む。作家活動を続けつつ、北海道女子短期大学で教鞭をとり、文部大臣より短期大学教育功労賞を受賞。



壁面レリーフ「未知を拓く」 [設置:1981年]

エントランスホールを見上げると、目に飛び込んでくるレリーフの一群。勇壮に海原へこぎ出す舟、農具らしき背負子を背負う生活者、そして同じ一点を指し示し、遠くを望む人々。彫刻家である坂坦道の作品です。坦道は三代にわたって美術家を輩出している石川県・坂家に生まれました。祖父は日本画家坂藤舟(あいしゅう)、父は洋画家で坂寛二。父寛二が没したのち北海道に転居し、その後、東京美術学校(現在の東京芸術大学)に入学します。祖父、父と同じように芸術の世界を目指しますが、生まれながらに色弱で色の区別がつかなかった坦道は、彫刻家の道に進んだのでした。最も有名な作品は、羊が丘にたたずむ「丘の上のクラーク」。そのクラーク像も、レリーフと同じように遠くに向かい、指を指し示しています。坦道は、力強く指差す彫刻を作りながら、その指の先には、いったい何を見たいのでしょうか。開拓の地だからこそ育まれた、後世に残る力強い作品です。

開拓時代の躍動感が、
 未来へのメッセージ。

氏次 啓から指名→

さっぽろ 演劇人

No.006

たち かわ げい こ
立川 佳 吾

人形と生身の役者。
ふたつの力が交わるから
生まれる舞台がある。



立川佳吾 プロフィール

札幌の劇団を幾つか経たのち、2012年立ち上げの人形劇と演劇が融合したパフォーマンスシアター「トランク機械シアター」に初期から参加。TVCMなど、ナレーション業でも活躍中。



SAPPORO ENGEKIJIN KEIGO TACHIKAWA

人形劇と演劇。近いようでいて、なかなか接点のないふたつの世界を行き来する「トランク機械シアター」。その立ち上げから関わり、活動を続ける立川佳吾さんにお話をうかがいました。

—— まずは、札幌演劇祭での審査員賞受賞、おめでとうございます。ありがとうございます。

「ありがとうございます。僕たちの作品は一応人形劇の枠で演じていますが、人形遣い自身も役者として顔を出します。他の演劇作品と見せ方が違うので、なかなか賞の対象になりにくのですが、評価していただけ嬉しです」

—— 立川さんは、最初は演劇から始められたのですか？

「高校から始めました。その時の高校合同練習で、氏次さん（前回登場）に出会って。本当は卒業後、すぐTPS（現・札幌座）に入る予定だったんですが、大学だけは卒業して欲しいと親から止められました。教育大在学中は、色々な劇団に参加しながら役者を続けていました。でも、役者って声がかかるまで待つことが多いんです。若いから舞台上に積極的に出たかったし、それなら自分の持ち作品を作りたいなと思って。ちょうどその頃、劇団千年王国の演出家の橋口さんと出会い、プレゼンをしたんです。橋口さんの舞台に1年間出演するので、僕のためのひとり芝居を作ってくれないかと。実は、その作品がいまの人形劇

の原型になったんです」

—— 人形劇の、どんなところに惹かれたのでしょうか？

「演劇はわりと固定客が多いのですが、人形劇はたとえばこぐま座という小屋にお客が付いて、大人から子どもまで色々な方が来場します。特に子どもという観客は敏感で、僕らがちょっとでも手を抜くと、すぐバレてしまうんです。大人はテクニクで魅せるという方法もあるんですが、子どもはこちらが汗をかいた分だけ楽しんでくれる。僕のこと、作品のことも、まったく知らなくても面白かったら笑ってくれるんです。そういう一回性のものが僕は好きなんです。色々な劇団に出たいたのも、そのせいかもありません」

—— 人形と役者が共存する舞台は、どのように生まれたのでしょうか？ また、今後の展開は。

「単純に、途中から人形劇の世界に入ったので、人形だけの表現が難しかったものもあります。でも、いまは逆にそれが舞台での新しい表現力になってきていると思います。人形だけでは出せない繊細な表情を役者がつくりだすことで、より深みのある世界観を作ることができる。子どもだけじゃなく、大人も愉しめる作品が作れることに気づいたんです。今まであまり交流のなかった人形劇と演劇ですが、もっとお互い影響し合って、札幌から面白い舞台が生まれればと思います」